

淨土

正月号

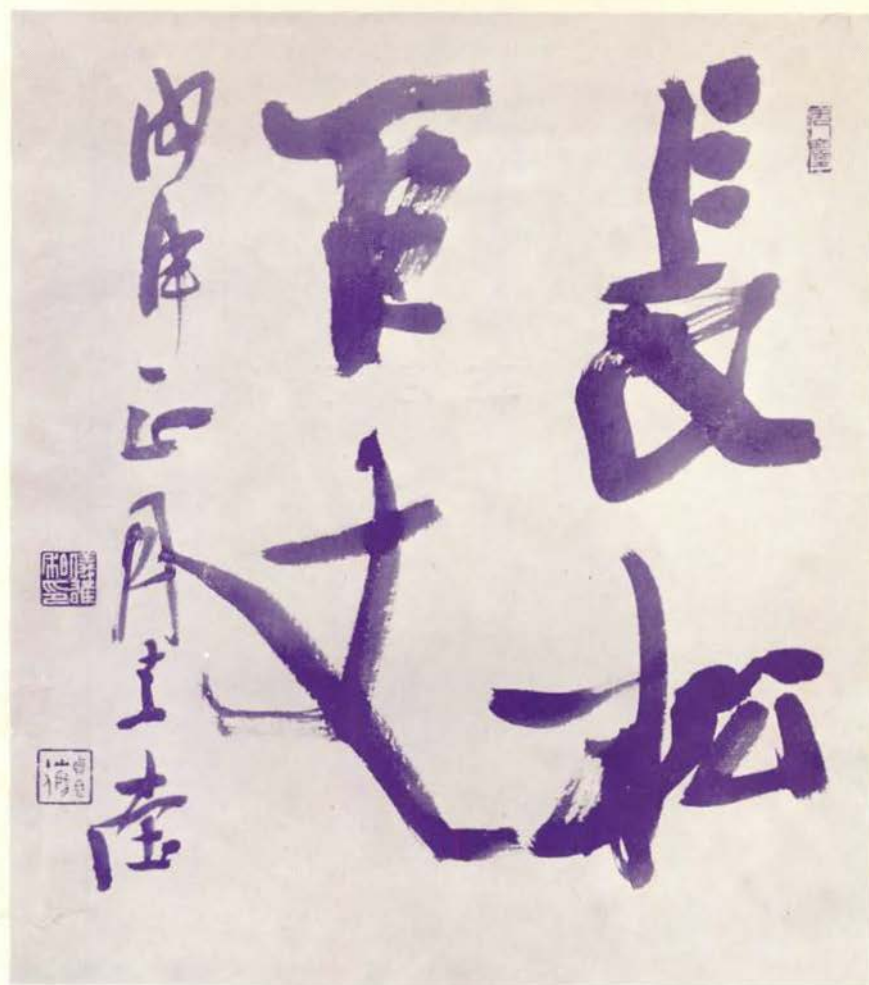


蓮

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省特別扱承認雑誌（第三五二号）
昭和四十二年十二月二十五日 印刷
昭和四十二年一月一日 発行

第三十四卷
第一号

法然上人鑽仰会



長松百丈

中村素堂

(書道家)

この語は菅茶山の詩の一句です。

余りに知られていない
ものですが、新年にふさわしいもので、私の好きな一つです。

— 目 次 —

表紙「寒梅」松濤達文画

- 新春に寄せて(2)
- お歌をいただく(5)
- 華道一すじに(老師匠の人生観)
.....佐藤治子...(6)
- 布教コンサ
ルタント (文化センターとしての寺院)
.....(11)
- 仏教とキリシタン信仰岡田章雄...(12)
- 名士訪問・中村素堂先生(16)
- 冬の朝三川洋伍...(19)
- 四苦八苦⑤ 今日こそは(死)
.....渋谷賢応...(20)
- アメリカの印象 ③峰島旭雄...(22)
- 信仰相談(25)
- 和訳三部経④ 念仏は逆罪をも滅す
.....村瀬秀雄...(26)
- 創価学会文化祭に学ぶもの
.....(32)

千とせふる小松のもとをすみかにて

無量寿仏のむかへをぞまつ

法然上人御歌



新春に寄せて

御題「川」

岸 信 宏

(浄土宗門主)

私は一昨昭和四十一年の二月に印度へ参り、仏陀伽耶の根本大塔の近くに、印度日本寺建設の第一期事業として建設せられた宝篋印塔の落成慶讃の法要に参列したのであります。その帰途ベナレスにおもむき、初転法輪所の鹿野園を訪ね、近くを流れるガンジス河に印度教徒の水浴の光景を見学したのであります。印度教徒の理想とするところは、一生涯の間にお金(かね)をもうけ、ベナレスに来て、ガンジス河の水浴場の中で、最も大きいこの水浴場で水浴し、死んだならばここの河岸で火葬にしまつて、その灰を悉く聖なるガンジス河に流してもらうことであるとのことでした。

私は本年御歌会初めの御題「川」にちなんで、印度の聖な

るガンジス河を思ひうかべて、次のような拙い漢詩をつくつたのであります。

天竺恒河曼碧漣。

(天竺の恒河、碧漣を疊む。)

高楼軒下段階連。

(高楼の軒下、段階連なる。)

成群水浴拝朝旭。

(群を成して水浴し、朝旭を拝す。)

印度教徒清淨縁。

(印度教徒の清淨なる縁。)

まことの教化

椎 尾 辨 匡

(大本山増上寺法主)

年久しく性頓に滞り、閻師におよび頌義によつて相傾教を明らかにされても、俱舎、唯識ではものにならず、明治も百年を過ぎた。今や新科学教育時代来り遊星連絡によつて新化学となる。一文不知の尼入道も教育百パーセントに伴う大学卒となつて学的業務をもち、弥陀大悲を仰ぐ念仏時代とならねばならぬことが無量寿光によつて導かれる。これは法然上人の四十代までに果された念仏弘通であり乍ら、平家没落、殺生復讐主義の土道に圧せられ、明治維新漸く帯刀復讐を禁じて、共生極楽成仏道なお広開されず、いまや依正共に真

に生きる教化となつて正法流布の使命を全うすべき年が来たのである。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

平素の心がけ

神 居 琳 応

(大本山知恩寺法主)

年頭に当たり、同信同志の各位に、新年のお慶びを申し上げる。私もすでに九十五才、今日まで心がけてきた平素の心がけについて、申し述べてみると、大乘仏教を信ずる者は、上は成仏を求め、下は利生を願はねばなりません。即ち常に菩提心を持たねばならない。菩提心は即ち四弘誓願である。

衆生無辺誓願度 煩惱無辺誓願断

法門無尽誓願知 無上菩提誓願証

以上、度断知証の四つの誓願は、大乘仏教徒全体の起こすべき宗教心であるが、浄土教徒には更に附帶せる二誓願がある。即ち自他法界同利益と共生極楽成仏道である。それが浄土教徒の最も大切な大発心である。

黄金の魅力

宮 本 文 哲

(大本山善導寺法主)

老衲は昨年十月大分教区佐賀関正念寺丹羽演誠師の晋山式に随喜した。式は真に厳肅且つ盛大で満堂の檀信徒の顔もこの良き新命を迎えた喜びで輝いていた。式が終つて日本鋳業佐賀関製錬所を見学した。聞きしにまさる大工場である。一般には見せない金や銀を電気で分離し収集する工場も特別に見せてくれた。おかげで色々と八十の手習が出来た。

「純金の結晶は鳥の形をしており」と係員の示した大金塊にははっきり鳥のマークが現われていた。尚この金塊は時価壱千万円以上だと聞かされて一寸驚いた。「持上げてごらんなさい」と言はれて試みたがビクともしなかった。係員はこんなエピソードも話してくれた。

「只今の天皇陛下がまだ皇太子の時当製錬所を御見学になった。其時之れと同型の金塊をごらんにいれ『若し殿下がこの大金塊を持上げられたら献上致します』と申し上げると殿下は微笑しながら試みられたが持上げる事が出来なかった」と老僧はジョークの香りのするこのエピソードが気に入った。

それは兎に角黄金の魅力は大したものだ。此世では吾等凡夫を迷はす貪慾の的となり、彼世では極楽の莊嚴となつて往生人を悟に導く、迷はせたり悟らせたり全くややこしいことだ。

ことしの期待

大野 法道

(大本山光明寺法主)

ことしの期待は何でしょうか、人々それぞれのものがありましょうが、広く云えば、宇宙時代といわれるように、人工衛星に於いて、どれだけ進歩するか、ということではないでしょうか。ソ連の革命五十周年を記念するパレードに、初めて出たミサイルが世界の目を見張らせたように、ことしは何が出るかが問題だと思います。

しかし、ただそれだけでは物足らない。そうした方向が何であるかを考えた時、これは恐るべき人間、乃至世界の全滅に向つて働いている外の何ものでもない。と思に当れば、ただ進歩とばかり、喜んで居られないでしょう。

けれども、そうした方向の進みも、人力ではどうすることもできませんまい。

さすれば、私達は本当に生きる心構えの鍛錬について、念仏の功德を積むことが、ことしはどれだけ期待できるかを考えるのが、意味あることだと思います。

正しい人生

一條 智光尼

(大本山善光寺法主)

科学の進歩により私共の日々の生活の有方も変らざるを得ない今日です。眼に見、耳に聴き、体にふれる事柄は猿まねのように替えも出来ますが、明日への進歩の為の中味は変わるべくしてなかなか変らない。それでいて永年戴き受け継がれた日本人としての、守りたい誇り高き独特のよさは徐々に失なわれ変わりつつあるのは悲しいことです。新年にあたり御下照願して時代に左右され過ぎていないか省り見たいものでもあります。

殊に私共浄土の御教えを受ける者は、この様な時代にこそ念仏申すことによって自らを清め慈光に抱かれて生かされる喜びを再確認して、愈々、お念仏に励みたいものであります。正しい人生行路は斯様な精進の中にこそ見出せるものと存じます。

御歌をいただく

千とせふる小松のもとをすみかにて

無量寿仏のむかへをぞまつ

(勅修御伝第三十)

「千とせふる」は千年も経たという意味で、下の句の無量寿に対応した言葉であります。また「小松」は老松のことですが、同時に法然上人が住まわれていた小松谷の地名をかけた言葉であります。「まつ」は待つていふという意味と同時に松にかけた言葉であります。そこで御歌の意味は

千年も長い歳月を重ねた松のある小松谷に住んでいて、阿弥陀さまのお迎えを待ちうけている。

ということになります。

この御歌は初めに「上人てづからかき給へりける」とあり、末尾に「元久二年十二月八日 源空」とあります。元久二年は上人御年七十三才にあたり、この年の八月にぎやく病をわずらって、小松谷に幽棲されたのでした。ぎやく病はおこりともいい、今でいうマ

リヤのことで、時間を定めて高熱を発する病氣であります。

この時の御病氣はかなり重く、藤原兼実公が心痛したことが勅修御伝に記されています。ところがこの年は御病氣のことばかりでなく念仏門に対する迫害が著しく、上人にとって御苦悩の甚だしかった年でした。

前年の元久元年には叡山の大衆が大講堂に集って、専修念仏停止の件を決議して、座主真性に申請しました。これに答えるべく上人は「七箇条起請文」をつくり座主に送りました。この文をみますと、上人のお弟子の中には世間から非難されても仕方のないような人があったようであります。中でも

一、念仏門においては戒行なしと号して、専ら婬酒食肉をすすめ、たまたま律義をまもる者を難行人と名づけ、弥陀の本願をたのむものは、造悪をおそれることなかつたという事を停止すべき事

一、みづから仏教にあらざる邪法をときていつわりて師範の説と号することを停止すべき事

等と記されているのをみても、およその事

態を知ることができます。更に元久二年十月には南都興福寺の衆徒から朝廷に対して念仏禁止と上人並びに門弟を処罰すべきことが要請されました。しかし幸いこの訴状は却下され、同年十二月の宣旨には一部門弟の中に邪執のものがあつたが、それらはかえって上人の本懐にそむくものであつて、それらの罪は上人に及ばない旨が明かにされました。

このように専修念仏に対する迫害が上人の身邊に強く押し寄せ、まさに急をつけることになりました。翌建永元年には登山状がつくられ、無智の道俗男女が念仏することは諸宗のさまたげにならぬことを明示されました。登山状は名文を以て知られていますが、更にその一句一句には上人の烈々たる熱意が述べられています。「念仏を修せんものは、余行をそしめるべからず。そしらば即ち弥陀の本願にそむくべきがゆへなり」「五逆をつくりて十念をとなへよ。十悪ををかし一念を申せとすむるにあらず」とも申されました。このような迫害の真ただ中であつたのに、上人は「無量寿仏のむかへをぞ待つ」と心静かに詠まれたのであります。(M)



華道一すじに

——老師匠の人生観——

佐藤治子

一、心のこもる握手

生花を通じて友情を結ぶ事を目的としているイケバナインタ―ナショナルと言う会がある。鎌倉にも支部があつて湘南地方に住む外国人を含め同好の人達七十人程が毎月例会を開き各流のイケバナのデモンストレーションを拝見したり、伝統ある工芸品の解説を伺ったりしている。昨年鎌倉華道会の創立者で二十年間も会長をなされた上代古流の永野貫斎先生にその月の会場である大仏殿に来て頂いた時の事であった。八十才を過ぎられた白髪のお先生は羽織袴の御姿で大勢の会員達の前に座られ、静かに生け込みをされていた。あまり御話はなさらないが、誰も居らぬかのように一枝一葉に精魂こめて生けていかれる御姿に場内はしーんとして心を一つにして

先生の御手許をみつめていた。時折ひよいひよいとおっしゃる御話の中で特に感銘を深くさせられた事があつた。それは華道についてであつた。

「凡そ道の字のつくもの、例えば、茶道、剣道、そして華道。すべて只ならうだけのものではない。お茶をたてるだけでない。刀をふりまわすだけでない。そして花もいければよいものではない。古言に『道は万世の宝』と云われている。

花も姿よく生ければよいと云うだけではなく、精神的のもの、即ち一枝一葉に心をこめて生けるのでなければ万世の宝となれぬ。たん錬による個性、品位が自ずと生けられた花の姿に現われて来る。こう云う気持がだんだんと薄らいで形だけの生け花になりつつあるやに感じられることは残念な事である」と云う意味の事を話された。終つてから私は感激の面もちで立ち去りかねている一人のアメリカの方を先生に御紹

介した。その方は極東米海軍空軍司令官の夫人であった。日頃から物しずかで日本のものをよく味わいかん賞される方である。

未だ座っていらっしゃる先生の前にひざまずいて握手されたが、夫人はその手をいとおしむかのように「先生の今おっしゃった御話がこうして握手して頂くと、私の指先からひしひしと先生の御心が私に伝わって来るようです。ありがたいことです」と云われた。私は先生にこの事を申し上げると「ああそうですか。分って下さって私も本当にうれしいですよ」とお嬉しそうな顔でお

っしゃった。私はこんなにも私達同様、外国の方にも分って頂けたのがうれしくいつまでも忘れられない事である。

二、祝賀会にて

永野先生が七十年もこの道に尽された御努力に対して勲五等瑞宝章が授与さ

れ、御門人の方達による祝賀会に私も御招きを頂いた。私は先生の御近くに席を頂いてあったので、日頃尊敬申し上げている先生と御嬢様の貫玉先生御二方の御動作を近々と拝見していた。横浜東急ホテルの会場へ多忙の中をかけつけて来られた鎌倉市の山本市長さんを初め、祝詞をのべられた方々はいずれもあらゆる面からの先生の高邁な御人格をたたえられた。御門人の中には、白髪の婦人達から華やかな色どりの着物を着ているお嬢さん達まで百七十人もいられたのであろうか。私の近くのテーブルにいらした中年の婦人方が感激の涙をふく姿も目に入った。先生は御一人々々の祝詞をうなずきつつ、或いはおじぎをされんばかりに、一言々々に答礼されていられるのである。御一人がすむと立上られ、その方の方へ向かって丁寧に礼をのべられていた。私はこんな美しい祝詞のべ方、受け方を最近みたことがない。これが本当の姿であると幾度かうなずき、先生の、そして御一門の御喜びが泌々と伝わって来るのであった。

御開きになって会場を出、コートを着て階段を降りようとすると「今日はどうもありがとうございます」と声をかけられた。振りかえろと御門人の一人の方が私達に丁寧におじぎをしていられた。見知らぬ人とは云い乍ら、招待されたお客一人々々に挨拶される御門人達の態度は一朝一夕にして出



来るものではなく、人と人との「道」をとかれるにちがいない先生の長い御指導があればこそと深く感じ入ったのである。

このように気持のあたたまる会には中々出あわすものではない。ひょうひょうとして、えらぶらない、ありのままの御姿で人に接しられる先生に人生觀を伺ってみたい。あたたかいものを感じるのみでなく、尊敬の念をますます強くいだけせる先生に御会いたくなった。

三、父上の教え

翌日は用事をふり切って初冬の街を先生の御宅へと向ったのである。先生の御宅は八幡宮の東側の静かな通りに面している。花八ツ手の垣をめぐらす御宅の前に立ち、ベルをならすと先生御自身で「よくいらした」と迎えて下さったのである。冬紅葉のお庭に面した御部屋に案内して頂き、私が座ぶとんを敷かせて頂たくまで、大先生は席におつきにならぬ謙虚な御態度。

「私の父は上野の戦争がすむところ鎌倉に居を定めましてね。その頃の鎌倉は未だ寒村でして、この辺は東鎌倉村、貴女のお寺の辺は西鎌倉村と云ってましたよ」「上野の戦争が

すんで」とサラリとおっしゃる先生は「父はきびしい人で、私は実にきびしくしこまりました」と父上の事のみ話をされる。

江戸の堀田伊勢守が生け花に秀でられ「月下園利斎」と雅号をもたれていた。その方に生花をならわれたお父上はやがて「上代古流」を創立され春秋庵貫斎と云われた。上代即ち神代時代を偲ばれ天つひつぎの榮えられん事を祈願されたものである。生け方は今もそのまま伝わっている。

お父上は鎌倉に住まわれて暫くは寺小屋を開かれていらした由。ぼつぼつと生花をおしえられるようになっても花やなどはない。

弟子達は自分々々で枝や草花を家のまわりから集めて持ってくる。弟子達の切りくずをみて「おお、今日も又たき木が出来るよ」とニコニコしていらしたそうである。「その頃は寿福寺の岩穴へ床をしつらえ剣道をけいこする灯がここから見えたものです。家など向う側の山のふもとまで無かったのですから」話にきいたり、絵でみた事がある昔の鎌倉は今先生の御話で私の頭の中にえがかれて行く。

先生は十四才から生花をならわれて、父上の代わりにおけいこに出られたとか。お年寄りの御門人が「おお、かわいい先生だこと。まだ肩あげをしていらっしゃる」と笑われたそ

うである。

或る日長谷の方のお大家の夫人の所へ代けいこに行かれた時、その方が「お父様はこわいから若先生に来てほしい」と云われたので「父が何か申しましたか」ときくと「ええ、しかられました」と云う。家へかえって何をしかったのかきいてみると「ああ、しかったよ。お花を何度か生けかえている内に、あきたのか乱棒に生けたので、貴女のような生け方をしては花がかわいそうだ。口がきけぬ花はだまっているが、人間であつたらどうしますか、としかつたのだ。ああ云う人は召使いにも思いやりをかける事は出来ない人だ。あの人の為を思つてしかつたのだよ。いやになつて止めたならそれもよい。わしはかまわぬよ」ときびしい態度であつたそうである。「私にはこの年になつても父のもつていた威厳はありません」と謙虚な態度ではいらつしやるが、しかし父上よりゆすり受けられた一本のすじを通す先生の真摯な御気性が私には感ぜられるのである。

「花には個性が表われる。見あきのしない花をみればみるほど心をひく何かある。一枝一葉に心をむけてその形を生かし、生けるべきである。一枝一葉に愛情をもち心をかたむけて生ける花こそ華道にふさわしい一つの生花が出来るものである」これが先生の信念である。八幡様の実頼祭の献花展に

或る日外人をつれた人が入つて来て「領事さんがお花を拝見しに見えました」と紹介された。一つずつみて居られた領事さんはその中の二点に特に心ひかれたと云われた。それは、えにしだところ、柳の一種生けで、一本もみだれずに線のはたらきで形をなして行くむずかしい生け方のものであつた。「色どりのあるものを選ばずに、これに心ひかれたと云う領事さんの鋭い觀察力には全くおどろきましたと云われた。

此の度いけばな芸術協会が創立され一大花展が開かれた時先生も出瓶された。高松宮妃殿下が会場を御まわりになつた時、先生の御迎えされる御姿に御目を止められ、「身体を大切に、指導に精進せよ」と御言葉を下された由で先生は「私のささやかな、目立たぬ生け方ではあるけれど『おごそかに自然を損じないよう心がけた花』を心にしていった。何でもない言葉ではあるが両陛下、各宮様方にも御高覧頂く事故「厳しゅうに、即ち謹んで心して生けたのです」と一人頭を下げ話されたのである。「此の度宮中に御召し頂き御言葉をたまわり、これ以上の光栄はありません」と深々と再び頭を下げ話されたのである。

父上が逝去された後、門人達が碑を建てたいと云い出された時も「人目につく所はいやがりますしう。菩提寺の法戒寺様の裏山の墓地なら父もおこりますまい」と主張された、先

生の目立つことをさし控えられる心からの謙虚な御心こそ、又これを尊しと思う人が多いのである。祝辞の中にも日頃先生のモットーとして居られる「和」を心として居りますとのべられた方もあった。

物静かな先生、けれど御父上の教えを宝とされ、七十年を華道一すじに米寿を迎えられ、その上叙勲の御沙汰を拝された先生は、御一門のみならず華道会の大切な宝としたき存在である。祝賀会の時先生が謝辞をのべられ、感激の面もちで和歌を朗々とおよみになった、その御歌をかかせて頂く御許しを得た。

あらたかな心持ち

前日までの忙しない日々から一夜明けた元旦、何もかも落着いた様に見え、思えるから不思議である。人は絶えず新しいものを求め前進していくのであるが、これに反省と勇気を与える区切が元旦である。あらたまの年を迎え、誰しもがこの一年を無事に幸福に過したいと願い、良きこと

こたび勲五等瑞宝賞を賜りてよめる歌

貫 斉 八十八

久方の天つ恵の

露にぬれ 花さく山路

更にのぼらん

この光栄に気も身体もひきしまる思いにて、更にけわしきことはあらうとも、この道に精進して行こうとの心を詠まれたものである。

がもたらされる年であることを望むのは人の常である。前日と同じことをしても何か新しいことのように思えるのは、その中にあらたかな心がかようためである。この心持が一年を通して貫ぬくことが伴わせである。しかし時が過つにつれもとの流れの中にもどってしまふ。これが人であるといえはそれまでであるが、絶えずこのあらたかな心持ちをもって過したいものである。

文化センタ としての寺院

現代においては、宗教を伝える立場の側にあっても、宗教や信仰を求める一般の人達の側においても、いくたの問題がある。

宗教を伝える立場、具体的には、お寺の在り方について考えてみても、いままでのような行き方だけでは、充分に、時代に相応し、大衆意識を認識した、教化活動をすすめていくことはできない。

求める一般の人達の立場も、むかしの人びとのように、信仰を素直にうけ入れることはできないばかりでなく、いわゆる無信仰の時代である。いいかえると、かつてのように、宗教という素地があつて、寺院は、そこに信心の点火する役目だけを果していけばよい時代と異つて、まず宗教に眼を向けさせること

から、はじめなければならない。耕やされた田畑に、種を下ろすのと異なつて、荒地の開墾作業からはじめることが必要である。

勿論、究極のすがたにおいては、お念仏の信仰が深まつて、一生涯を貫くものであるから、説法は、いついかなる時代でも説きつづけられなければならないが、しかし、今までのような一方通行的な、お説教の在り方は、多に工夫される必要がある。そうでなければ、一般の人びとの心をキャッチすることはむずかしい。どうしても、必要なことは、法を説く立場のものと、導かれるものとの間にあたたかい通い合いなければならない。いわゆるコミュニケーションがなくてはならない。

これからのお寺が、個の宗教から、社会宗教へ脱皮し、飛躍していかなば本當の意味での寺院の姿をあらわし得なくなるのではなからうか。そこで先月号で予告した通り現在寺院において幾多、文化センタの活動している実際の様子を紹介し布教の参考としていただくのが今回の「布教コンサルタント」を企画した所以である。以下その例題をあげ、これらの中から毎月一項目を抽出し、その実際の活動を紹介していくことにする。

文書関係

月刊誌（寺報）・ハガキ・掲示板等

集 会

法話・講習会・研究会・座談会等

文化活動

音楽・演劇・読書等

生活相談

家庭・商売・学校等

施 設

幼稚園・保育所・日曜学校・学習会・各種教室・老人ホーム・病院等

事業

駐車場・アパート（貸間）等

仏教とキリシタン信仰

岡 田 章 雄

(東京大学教授)



(一)

いまここでは、キリスト教の人たちが、日本の仏教や、仏教のお寺というものを、どういう風に見たか、また、日本の仏教とキリスト教の対立、キリシタン信仰というものは、日本の仏教信仰と相容れないで、最後には、日本から追放されてしまいましたが、そのキリシタンの信仰と仏教が、どのように交錯し、どのような対立をしたか、そのような問題について、考えてみたいと思います。

まず、キリスト教の日本に入ってきた、フランシスコ・ザビエルの事からお話しましょう。ザビエルは、ご承知のように、天文十八年、つまり種ガ島にはじめてポルトガル人がやって来て、日本に鉄砲を伝えたといわれる。五年ほどあ

とに、ザビエルは、日本にやってまいります。フランシスコ・ザビエルが、なぜ日本にやって来たか、という問題ですが、これは非常に興味ある事柄があります。ザビエルは、ヤソ会から派遣されて、まず、第一にインドにやって来て、それから南洋の諸処方々の各地を廻って伝導の旅をつづけています。

そして、マラッカで日本人にはじめて会ったのが、薩摩のサムライの有名な安次郎という人です。この人は、鹿児島で殺人かなにかを引起して追われる身となり、自分の弟と召使いと一緒に町にいられなくなり、逃げだすと追手が非常に厳しいので、結局薩摩の海岸から、ポルトガル船に乗って脱出し、マラッカに連れてきてもらったという、小説風の話があります。その安次郎がマラッカでザビエルと会い、ザビエル

は、かれから日本に関する色々な情報を聞くわけですが、安次郎も武士ですから、相当教養も高いので、色々のことを知っている。ですから、このザビエルが、いわば日本人の見本として安次郎をみた場合、日本は非常に優秀な国だと感じて日本に布教することを感じたのです。

しかし、この安次郎から聞いた話のなかで、ザビエルがとくに宗教について問題にしたことは、日本には回教がないということです。ザビエルが、東インド各地を伝導の旅をつづけたときに、カトリックの布教の一番妨げになったのは、回教であつたからです。つまり、アラビアンナイトに出てくるアラアの神様を拝するファイイ教ですが、そもそもアラビヤ人が、ポルトガルに進出してくる前は、アラビヤ人が、アラビヤからインド洋を経て、東インド地方にかけて、貿易の仕事をしていたのです。そのため、アラビヤ人が各地にみな足場を作っているのです、それにつれて、アラアの信仰も弘まっていたのです。そういう地方に、キリスト教を伝導するといふことは、非常にむずかしいことなのです。

カトリックと回教は、非常に性格が違っています。回教徒をキリスト教徒に改宗させることは非常にむずかしい。それに較べて、南方の島に行つて、その土地のいわゆる原始信仰のある所では、原始信仰をキリスト教に導き入れることは、

容易なことです。

ところが、日本の情勢を聞いてみると、回教の影響が全くない。回教はないけれども、日本には古来の原始信仰の神と、インドからシナを経て日本に來たところの仏教のほとけの二つがある。しかし、ザビエルの計算では、日本に行つてキリスト教を弘めることは、非常にらくではないか。場合によつては、日本の国を統治している国王八天皇に、日本中にキリスト教を弘める許可を得て、日本全土をキリスト教にしてしまふことができるだろう。

このように考へて、ザビエルは、非常に大きな夢を描いて日本に、即ち鹿児島にやつて來たのです。安次郎は、ザビエルを連れてきて、島津隆久に紹介したり、薩摩の殿様に紹介したりして、かつての殺人事件などは帳消しになってしましますが、その場合、安次郎という人は、キリスト教伝導の仲介者としての役割を果たします。かれが、お説教の場合に、ポルトガルやスペイン語では、説教ができませんので、日本語になおして話をするようになります。ところが、その当時キリスト教の用語が日本にはないので、お説教に用いる言葉は日本の仏教の言葉なのです。仏教の言葉をかりて、それを翻訳するわけです。ただし翻訳する場合に、山とか、川とかいう風に具体的なものならよいのですが、抽象的、宗教的な言

葉になると、大変むずかしくなります。たとえば、タマシイという言葉は、キリシタンでは、アニマルといい、これを訳して、魂（靈魂）というが、そのニュアンスがむずかしい。ゴッドという言葉にしても、キリスト教の神と、日本の神道にてくる神々との違いもあるわけです。

つまり、抽象的なことで、とくに宗教的な言葉の翻訳の問題が、ひっかかってくるのです。カトリック、キリスト教には、一番中心になる、ゼウスという天地創造の神様がいますが、安次郎はこれを「大日」と訳しています。仏教の「大日」です。ですから、ザビエルは、「大日」という言葉をお説教にさかんに用いている訳です。だから「大日」を拝めといえ、仏教の方でも「大日」といえば、信仰の中心となっている。この「大日」を拝め拝めというので、日本の仏教の坊様の中にも、これは仏教の新しい宗派が天竺からやってきたのであらうと思っていました。天竺は申すまでもなく、お釈迦さまの生れたインドであり、そこからやって来たというのです。

つまり、ポルトガル人は、インドに根拠地を置いて、それから日本に来て居るわけですから、天竺から来た坊様が「大日」を拝めといっているのだから、これは、要するに、仏教の新しい宗派であるということで、仏教の坊様達も、それに

反対しない。そればかりでなく、自分達の仲間が増えたというような考え方をもっていたくらいです。

そのザビエルが、色々の人の話を聞いたりして研究してみると、「大日」というのは、仏教の中心の仏様で、天地創造の神とは性格が違うのだということに気がつきました。だから、「大日」を拝みなさいと今までいっていたのは間違いだ。「大日」を拝んではいけない。仏教の言葉を使わずに、カトリックの坊様が使っている「ゼウス」という言葉を、どうしても使わなくてはならない。「ゼウス」あるいは「ダイウス」という風に、直接キリシタン用語を使うことになったのです。ゼウスは、天国ともいわれる。要するに、パラダイス、パラソであって、仏教的にいうと「極楽」です。ところが、地獄というのは、キリスト教でいう天国、地獄というものと、仏教でいう極楽、地獄という場合と、全然性格が違うのです。非常によく似ているけれども性格が違うし、カトリックの方では、仏教の方と、まぎらわしくするのは良くないということ、なるべく原語主義をとる。だから、天国のことは、パラソというし、地獄のことをインフェルノといい、魂という言葉を使わないで、マニアというように、もとのラテン語を使って布教する方針にかえたのです。

だから、「大日」を今まで、拝みなさい、といったのを、

押んではいけないというように変わってきたので、仏教の方では、今までは自分達の仲間がきたんだと思っていたのが、全く性格が違うんだという認識が深まってきたのです。

むしろ仏教の坊様達の方では反対が強くなってきました。仏教側はダイウス、ダイウスと言って、あれはダイウソと言って「大きなウソ」だと言って反対したと言うようなことも言われています。なお、ダイウスという言葉はザビエルの頃から江戸時代の初期、少なくとも鎖国の頃までは、ダイウスという言葉はよく使われています。近世文学、近世初期の文学をもし研究するようなことがあります。その中にダイウス宗という言葉がでてきます。仏教の坊さんで一旦キリシタンに入り、それからあとでキリシタン排撃の側に回りました。ハビアと言う人が書きました本に、排ダイウスというのがあります。つまり、ダイウスという言葉がわからなければ、どういう意味だかわからない、そのダイウスという言葉が、ダイウス・キリシタンの信者の事まで皆ダイウスと言っているようです。その他キリシタンには、南蛮宗とかまた天竺から来たというので天竺宗という言葉もつかわれています。寛永の頃にかかれた連歌の中にこういう歌があります。

「とても死なばいかでかはらをきらん、江戸せめにあう
武士のダイウス」

どうせ死ぬならば武士の事だから腹をきって死んだらよさそうなのなのに、要するにキリシタンだと言われて腹を切る自殺する事が出来ないゆえに江戸責めに会う、つまりごうもんに会って苦しんでいる武士のダイウス、つまり武士のキリシタンである。寛永の頃になるとキリシタンの弾圧がかなりはげしくなる。ましてどこの町、林でも皆なキリシタンの探索がきびしくなった。ある山の中の小さな村でも、代官からおふれが出、ダイウスをとらえてまいれという、そうすると百姓達が集まりダイウスは何だろうと相談するがだれも知らない。その内頭のいい人が一人いてその人がさしずをし、次の日、代官様の門前に集まり代官を呼び、大きなウスになわをかけて百姓の代表が、

「村中さがし歩きましたが、これ以上大きなウスは村中さがしても有りません」

と言った、これは当時の小話^{こばなし}ですが、このぐらいダイウスという言葉が出てくる。少なくとも鎖国の頃まではダイウスという言葉は普通に使われていた。それは要するにキリシタンは、はじめの内は、仏教の言葉を使って、そして仏教の言葉を使うようにしろというふうになった。しかし全体の説教の調子は仏教のその当時のいろいろ書いたもの、あるいはいろいろの用語を使っていたようであります。

(名) (士) (訪) (問)



中村素堂先生



もともと短歌でして

冬とは言っても、温かい日さしの中で、ニコニコと温顔そのものの先生は、時には笑いながら

「いや、私はね。もとは、短歌をやっていたね。それが、何時とはなしに、書道に入ったんです」

語られることが謙遜そのものであるのに、何処までが、本当かと記者はとまどう。書の大家とのみ考えていた記者には、何かこのことが、一向に納得できなかった。

「一体、そのいつとはなしには、どういうことですか」

「いやね。これでも私は英文学を専攻していたんですよ」

全く、又此処でびっくりした。

「それがね、どうも身体が弱くてね。今でいうならガンに相当する肺結核になりましたね。それで、一切学問を断念して、短歌に入ったというわけです」

やっと、英文学から短歌に入られたのは分ったのであるが、それから書道に入られた道

順が一向に分らない。肺結核をやったと言われるが、今の堂々として大柄の体軀や、顔の色つやから押して、とてもそんな大病を持っておられたとは思えない。

「ところが、歌を教えてもらった先生が、短歌はうまくても、短冊にも書けぬ字では仕方がない。少し、お習字をやりなさいと注意されましたね。それから今度はお習字にこつたのが、とうとう書道の世界に入ってしまったというわけですね」

成程、成程。それにしても、とうとう本物の書家になられた先生は、ただ者ではない、と感じ入った。

勅題に入選した

「私は、余り短歌のことは言わんようにしているんですがね。それでも戦後始めての勅題に入選するの光栄に浴することができました」

一芸に達するという事は、万芸にも達することなのであろう。短歌も一流という事となる。

「それで、その歌といいますのは」

先生は、遠慮をして、なかなか言われな
い。それでも、記者がせがんだので

安らかに 土より萌ゆる 若草を

踏めば したしも

陽のぬくみあり

これは、「若草」という勅題であつたそう
である。いかにも、先生の人格がそのまま歌
になつてゐる様な人である。

一度、この先生に接する人は、その温容と
そこ知れる人格と、博い識見に魅せられるに
違いない。数知れぬお弟子さん達は勿論、い
まも大正大学で書道を講義、実習されてい
るが、学生達の信望の厚いことは、此の上な
い。

大臣官房で恩給もらう

「先生は、書家として、ずっと今まで」

「いえいえ、私は当初都立の中学校の先生
から出発しましてね、先生生活は随分長い
んでございますよ。しかしね、その後大臣
官房の文書課に入りましてね、役所ずとめ
というわけですよ。恩給を頂いておりま
す」

これも又、驚きの一つであつた。

「今の総理の佐藤さんなんか、その頃は、
課長でしたね」

「それでどんなお仕事を」

「やはり筆です。陛下への奏上文やら、総
理の祝辞、弔辞等、いろいろと書いて来ま
した。お蔭でいろいろな人とお付き合いが
できましたね、今でも大へん助かります」
人の一生というものは、随分曲折のあるも
のであることであると、記者もつくづく感じ
入つた。

「その頃、慶応大学の国府犀東先生と、二
十年間も向い合つて仕事させて頂きました
ね、いろいろと教示を受けました。先生は
その草稿係りをして居られたわけです。漢
文の教育を受けたのも、この先生からなん
です」

坊さん学校に來たから最後です

先生は、貞香書道会を結成して、長年多く
のお弟子さんを教育してこられた。

「もう四十五年になりますね。来年は祝賀
会をやりたいと思つています」

先生は今数え年で六十七才であるので、人
生の大半はこの書道の世界で生きて來られた
わけである。

「いろいろの勤めをし、教育の世界でも、

長いことやってきました。大臣官房にいた
時でも、上官の許可を得て兼職で商業高校
で教えていましたからね」

「まだまだこれからですね」

「いや、もう坊さんの学校に來たので、こ
れが最後でございましょう」

そう言つて、先生は高らかに笑われた。

今では大正大学だけで教鞭をとり、後は好
きな書を好きな所で、お弟子さんに教えるとい
う事らしい。且つて、小学生を私塾で教えて
おられるのを見ていたが

「わかつたね。これはこういう風に書くん
だよ。そうだそうだ。なかなかうまい。丸
をあげよう。はいご苦労さん」

とまことに、屈託なく子供達と語つておられ
た。好好爺と言つた風貌であつた。何処の世
界にも、自然にとけこんで行かれる良寛さん
のようなものを、感じた事があつた。

珠数をかけて寝る

「先生の仏教に対するご造詣が、ただものでない様に思いますが」

「いや、そんなこともありませんよ。念仏生活をいたしているだけです。それに、妙心寺の管長の間宮英宗禅師の門で八年も座禅して、印可も受けました」

ここでも、又びっくりさせられた。

「それがね、私は始めはクリスチャンでしたのですがね、且つて学生修道院に入った時、河合横水先生のお話がありましてね、キリスト教の話の中に盛んに仏典を引くんですね。その内に、仏典の教えに、より引かれるものがありましてね、そこで或る人の紹介で、間宮禅師に入門したわけです」
どうも、先生の御体験が余りに広がりすぎて、記者はとまどうばかりであった。

「それ以来、頭はのぼさん事にしました。学生は念仏禅の大本山だとひやかします。寝るときは、珠数をかけてやすみます。毎日珠数を持っております。大正大学の学生で珠数を持たぬ者は叱るんです」

そう言つて、ズボンのポケットから珠数を取り出された。なんと徹底したことであろうか。まさしくこれこそ、行者であると、頭の下る思いがした。

筆跡をたずねてシルクロードへ

「この前はインドにご旅行でしたようですが」

「はい。昭和四十年の暮から、正月にかけて、仏跡を参拝して参りました」

「最近も行かれたようですが」

「ええ。シルクロードを東大の江上先生等数人と共に歩いて参りました。筆跡に対する疑問を、現地で解いてみたいと思ひましたね」

先生の今の大きな問題は、写経の独得な文字は、用いた筆から来ていると考えられる事である。

「平筆といひましてね。平たい筆で書いた書体に違いありません」

この平筆の書体は、漢代の木簡の字にはつきりとあらわれている。そうした平筆の書体が、写経の字になり、更に活字の字にまで継

がったものに違いないと判断された。そこでこの平筆の源流を求めて、シルクロードを訪ねられたというわけである。

「平筆の使い状況を求めて行きますとね、エジプトの博物館の紀元前五世紀頃の絵巻物に、手を斜めにして書いている姿がありましてね。これは確かに平筆です。又ガソダラの仏像の破片の中にも、そうした筆の持ち様をしたのがあります。これも平筆を持つてのことに違いありません」

こうした、西域から仏教が流入すると相持つて、平筆が入つてきて、写経などにこれが使われたに違いないと、先生は、平筆の流伝の中に、文化の流れを見究めようとされていく。

最近先生は、研究ノートのものを出版されるそうであるが、更にその後は今の研究を纏めて出版したいという。

話しは流れる様に尽きることがないが、先生の何事に対しても解明し尽さねば止まぬ好學精神と、その努力に敬服するばかりであつた。

冬の朝

三川洋伍

昨年のくれ、イギリスの経済界は空前の混乱状態となり遂にポンド引下げ政策を発表、全国民に自重ある生活呼びかけるに至った

元来伝統的保主国家のイギリスでは階層が固定化し、上流階級では子や孫が生まれるとはやばやとオックスフォード大学やケンブリッジ大学等の有名校に入学願書を出すそうであるが、この点から貴族の子は貴族、運転手の子は運転手、カジ屋の子はカジ屋というように社会の階層が生まれながらに決り、下層階級の英才には伸びることができないという機構体ができているのである。したがって今回の経済危機もこの様な中に漸々にできつつあった結果といわれ、この政策も焼け石に水との見方が強い。

一方日本では戦後人波をかきわけても、一歩先に出ようと絶えずさまざまな過当競争が会社・世間いたるところで行なわれている。われもわれもと大学に進み、この競争に負けずと、教育ママになる珍語まで飛び出すに至っている。見方によってはバイタリティーにあふれて大変よいことであり、競争心を失わない、エネルギーを喪失しなかったイギリス国民にくらべればましであるかも知れない。しかしこれでよいのであろうか。

◇ ◇

昨年のくれ寒さ厳しくなったある冬の朝、私はいつものように本堂の雨戸を開けようと渡廊下から本堂に入ろうとした折、ふと外を見ると窓越しに一人の男が本堂の外縁のところに坐っているのが目にとまった。誰かと思いついて戸を開ける前にその男の所に行きいろいろたずねてみた。

その男は季節労働者として東北の一閑村から出かせぎに来、寺の近くの宅地分譲地の工事現場で働いている由、生来身体が弱く肉体労働者としては不適格ではあるが、一家八人の生計をたてるためには仕方がないとのこ

と。近年農村も近代化が進み収入はとみにふえつつあるが、これとて土地を多く持っている一部の豪農の話で、私共のように耕地も少なく、ましてや家族の多い者にとってはその日ぐらしが精いっぱい、したがって農閑期には都会へ出かせぎに来るのです。しかし学歴のないのが致命傷でいつもに水を飲まされておき、せめて子供には味わせたくなりませんからがんばっているんですが、仲々うまくいきませんよ、ですから気の向くままに寺に詣り心を静めているとのことであつた。

この一中年の出かせぎの話しを聞きながら何もしてやれない自分にはがゆさがあつたが一体どうすれば良いのか。戦後の急速な発展の裏にはこのような人々がどれだけのことをしているか。某電気メーカーの重役の学歴無用論がでて以来、少しではあるが是正されつつあるといってもまだ根強い学歴なき者への圧迫がある。しかしこのような人々ほど心は純粹であり、真の意味での日本人としての気持がかよっているように見えて仕方ない。このような人々を救う道は全くとざされてしまっているのだろうか。



新しい年を迎えました。

除夜の鐘とともに去年の煩悩をうち払い、一切の罪障を心より懺悔し去り、初日とともに希望の年を迎えたのです。

この年改まる時点に立って、吾が人生のこし方と、はたゆくてとを、しみじみと想わぬ人はございますまい。またこの年に生かされているよろこびをかみしめぬ人としてないでしょう。そしてまた、この一年いかにして生きゆくかの道標を求めぬ人があらうはずがございません。生かされているよろこびと、生き抜いていく道標と、それを我が師、お釈迦さまにおうかがいたいでしょう。

四 苦 八 苦 — その五

今日こそは(死)

渋谷 賢 応

バッテーカーラッタとは呼ぶ

(中阿含、百六十五、温泉林天經)

つつしみて過去を念ずることなかれ
また未来を願うことなかれ
過去のことはずでに滅し
未来またいまだ来らず
現在所有の法

彼またまさに思をなすべし
不変不動を知りてこれを追へ

今日こそは勤苦をなすべく
誰か明日の死を知らんや
吾等かの死の大軍と戦いて
ついに克つことなきが故に
かくのごとく熱烈に昼夜に怠りなく
勤精進の中に住するもの
それをは良き牟尼は

バッテーカーラッタとは「最上の善と楽しみ
のおしめしとうけとり」と言うことである
うです。

この偈文を歌われたお釈迦さまは、これ以上の広説をなされず、さつさとご自分の室に入られてしまった。これを広説したのは大弟子のマカカセンネン尊者やロマサカニーヤ尊者、アーナンダ尊者で、それぞれに自分の所信をのべておられます。それ程お釈迦さまの信念的なおことばであり、言わば絶句とも申

すべきおことばで、広説の余地なき境のものであるでしょう。今ここに私見をさしはさむはおこがましき限りとは存じますが、不遜をかえりみず味わせていただきます。

「この悠久の時の流れの中にあって、私たちの生はまったくの瞬時と申さねばなりません。吾が過去に恋着し、架空のバラ色の未来を思つてはなりません。過去は今はないものであり未来もまだ来てはいないではないですか。今に、今自分がふんまえてこの今によくよく思いをいたすべきなのです。この今をこそつとめはげむべきなのです。誰が明日の死を予知できません。われわれはあの死と言う大軍と戦つてついに勝つことはできないからです。だからこそ今が尊く、だからこそ生かされていることがありがたいのです。このようにして熱烈に怠りなく、つとめはげみの中にひたりつくしているもの、これぞ最上の善であり楽しみであり、大安心であるのですよ」

辞句の解釈は以上のようなことになりましょうか。



因果の時の流れは無視することはできません、因が果となり果が因となり、動かすことのできない物理的な法則のように流れてまいります。年改まると申しても、昨年までの借金が傳引きになったものでもなく、昨日までの重病人が急に快癒することもないわけです。だからこそ人は過去に執着し、未来を夢見て生きてまいります。それが人生の生きがいであり、また苦しみでもあるわけです。因果の法のまぬがるべからざることはつねづねお釈迦さまのさとされたおことばでした。この偈の中で「過去のことすでに滅し、未来いまだ来らず」と申しても、これを無視せよと申されたわけではございません。むしろ因果の理において、妄想を託してはならないとさとされているわけです。我執の眼鏡で過去、未来を見ることのおろかさを指摘せられていくわけです。

ことに未来においては、人智を以て予知することのできない「死」と言う断涯が、時の流れのいつれかに待ち伏せているわけです。

この死も「生あるものは必ず死す」の因果律の鉄則の中にあるもののなのですが、それが人智の埒外あつていつ破裂するとも計りがたい時限爆弾の姿をもって不気味に待ち伏せているわけです。このことを深刻に思いつめれば今日の仕事にさえ手もつけられないような焦燥にさえ駆られることでしょう。ここにおいてお釈迦さまは決然とさとされるわけです。

「だからこそ今日を怠るな
今を悔いなく生きよ

これぞ大安心の道である」と。

刻一刻を悔いなく生きることが最上の安心であり、これが浄土への通入する門とも受けとられるわけです。

ここに到つて宗祖法然上人の次のおことがししみじみと思ひ出されます。

「生きては念仏の功をつみ

死なば浄土にまいるむ

とてもかくてもこの身には
思ひわずらふことぞなし」

アメリカの印象 —その3—

—キリスト教系大学の経験を通して—



峰 島 旭 雄

批判的立場

デポー大学の哲学宗教科のスタッフのうち、これまではもっぱら、キリスト教の内部に身を置く人びとのみを取り上げてきた。しかし、なかには、ガスターフン助教授のようにキリスト教（とくに現在の教会のあり方）にたいして批判的な立場になつた人もいる。かれは哲学史の授業を受けもっており、プラトンやアリストテレスなど、ウォルター・カウフマンの大部の編著を用い、かなり突っこんだところまで講義していた。はじめ講義を聴講したときは相当の年配の人だとおもつたほどであったが、よく附き合つてみると、かえつてわたしより若いことが分かつた。ゆつたりした人で、この人と一つの話しを終わらせるにはずいぶん時間がかかる。デポーにいたあいだに二度ほどわたしどもを招いてくれた。かれにはエール大学でPh.Dをとっているが、夫人もまたエール大学でPh.Dをとっている。アメリカでは夫婦そろつて博士というのは珍しいことではなさそうだと

おもつていたところ、かれのいうところでは、やはりそのような例は少ないとのことである。わたしといつしよに仏教を教えたキング助教授が今年度はイギリスのロンドン大学へ一年間研究に出かけたので、このガスターフソン夫人が新約かキリスト教概論かをわつて教えているはずでいる。

この夫婦のあいだにマイクというかわいい娘さんがいる。うちの子供たちも仲よくなくて、マイク、マイクといつて遊んだものだつた。たまたま、うちの子供たちがゴビン・チャーチのチャーター・ハウスに日曜ごとに厄介になつてゐる話から、ガスターフソン助教授の批判的な所見（夫人も同意見）をきくことができた。かれは概して現在のキリスト教々会のやり方に不満をもつてゐる、日曜学校など一週に一回だけ、それも毎回おざなりに、知識の注入だけしてゐるのでは、なんにもならない、というのである。しかし、そうかといつて宗教（religion）育（education）そのものを否定するのではない、とかれはつけ加えた。そこでわたしはこう質問した——教会をはなれての宗教々育は可能であるか、また、その具体案

いかん、と。かれは考えた——その教会をはなれての宗教々育ということが、いまわれわれにとって（マイクがいるので）最大の問題だ、しかし、まだ具体案はなにもない、と。

ガスターフソン助教は、この四月、インディアナ哲学会でおこなわれた自然神学をめぐっての討論に出たが、ノートル・ダム大学の論者が自然神学にたいして否定的立場にたったのたいて、それがある意味において（またその意味においてのみ）成立しうることとを主張したという。これはかれの批判的立場を如実に示すものであるとおもう。

カリカー牧師

カリカーさんは大学つきの教師、チャブリンである。ながいこと進駐軍づき教師として日本にいたことがあり、日本通で、こちらが「ハロー」と電話しても「こんにちわ」で応待するといった人である。はじめ技術方面を志したとのことで、機械通であり、ニュートン助教とおなじくカメラに詳しい。わたしがキャノネットをこわし、8ミリをこわし

たときも、このカリカーさんにみてもらった。8ミリやスライドの映写機をかしてくれただのもカリカーさんである。

毎水曜日、ゴビン・チャーチでおこなわれる礼拝を用意し、それに立ちあうのが、カリカーさんの主な役目であらうが、そのほかに、わたしの目にふれただけでもかれの役目は三つほどある。まず毎水曜日の礼拝と毎金曜日の講演に必要な講師を選定・交渉・接待する役目である。講師の選定・推挙にかんしては別に委員会があるが、おそらくこれは諸問機関にすぎず、じっさいはカリカーさんがやるようである。それから、学生たちの生活指導一切である。原則として男子学生は四年間、女子学生は三年間、寮へ入るので、学生たちのとりしまりは非常に重要な役割になる。カリカーさんは学生たちのほとんどの顔と名前をおぼえているらしい。道で出会う学生ごとに、そのファースト・ネームで話しかけ、たとえば具体的に、昨日のあのことはどうだったか、などとときくのである。小人数の大学だからこのようなことができるのだといつてしまえばそれまでだが、カリカーさんは

これを自己の一種の特技とでもいいたいに、その役割をたのしんでいる風情である。第三の役目は外来客の接待である。すでに述べたように講演者の接待が主であるが、ニューヨークやシカゴに比べれば、かけはなれて不便なこのグリーンキャッスルに、デポー大学に、一年間かなりの客がやってくる。その接待で明け暮れるのである。八十年まえにデポーに学んだ日本人学生の縁故者、佐藤新平氏が先祖の業績を調べに立ちよつたときなども、相手が日本人だというのでわたしを引っぱりだして二人で、飛行場まで出迎えたり、また見送ったり、宿泊——大学附属施設のログデ——の世話をしたり、キャンパスから郊外まで自分の車で見物につれていき、レストランでご馳走をしたり、ということをするのがやはりこのカリカーさんの役目である。

日本人 銀

アメリカにかつて行った人びとから、道を歩いていたらジャップ、ジャップと嘲られた

とか、ドラッグ・ストアで、若いヨタ者風の男から日本人だというのでインネンをつけられたという話をきかされていたのだが、グリーンキャスルでは、一年間ついにそのような不愉快な目にあつたことはなかった。それどころか、すべての人びとがわたしにも親切であり、とりわけ日本に行ったことのある人びと（デボー大学の教授で研究その他で日本へ行った人びとから、進駐軍として、あるいは朝鮮戦争のとき、日本へ行った人びとにいたるまで）は、なつかしげにさえ、わたしどもを遇したのであった。中華料理、留園の社長、盛氏の手記ではないが、日本・日本人は朝鮮戦争のしおに乗ったのであり、人のふんどしで相撲をとっているのであるかもしれないが、いずれにせよ、日本・日本人にたいする評価はたかく、すべて好意的なのである。

この一文の冒頭で触れたように、グリーンキャスルには、日本人はわたしども以外には二人しかいない。郊外にあるIBMにつめているバッテリー氏に嫁して男の子が一人ある栄子さんという婦人と、デボー大学のエア

ロスベイス・センター（航空科）の助教をしているシアリー氏に嫁して、この八月一子に恵まれているはずの富子さんという婦人の二人である。いわゆる戦争花嫁の大部分がその後うまくいかず、なかには発狂したり離婚したりしたケースが多くあるといわれているが、この二人の婦人は成功した顕著な例である。成功しただけの素質や努力が彼女らにあることはたしかである。だが、夫たちの惚れこみ方も成功の一因であるようにおもわれる。かれらにとって彼女らはおそらく神さまにも比すべきものであらう。はじめてバッテリー・栄子家に行ったとき、バッテリー氏の口から出る言葉といえば妻にたいする礼讃の言葉なのである。エイコの料理はおいしい、エイコは頭がよい、エイコは自分より英語が正確である等々。じつさいエイコ夫人の内助・外助の功は大したものではある。夫のこまかい世話はもちろん、庭には畑をつくって自給自足をはかり、内職のお花づくりから洋服の仕立てまでやり、小学生の息子には好きなように音楽をならわせ、ときに頼まれれば、息子のクラスへ出向いて日本紹介を一席やっ

てくれるほどである。このような日本人は日本であらうとアメリカであらうと成功するのであらう。シアリー・富子夫人はこのバッテリー・栄子女史ほど積極的な性格ではない。名古屋の仏具屋の娘とかで、おっとりした人である。夫たるシアリー氏は妻の生け花に尊敬の念をささげ、とくに赤ちゃんをお腹にもってからは献身的なサービスぶりであった。このシアリー氏がすすんでわたしの担当した日本文明論のコースを受講したのであった。本文明日論というコースはあたらしく設けられた実験コースで、シアリー氏のつくった俳句は異色あるものであった。句のうち一句がさに富ま子夫人にかかわるものである。

The joy of new life

After eleven barren winters

Has come to my wife.

（直訳—十一年の不毛の冬のに新しい生の喜びがわが妻にやってきた）

以上とりとめもなくアメリカでの印象を述べたが、「人間（性）はどこまでも変わりがない」という核心は一貫しているつもりである。

〈信仰相談〉

念 仏 申 さ ぬ 妻 を

ど う 指 導 し た ら よ い か

問

私は、自分で申すのは変ですが、根っからの念仏信者です。もう二十年来、念仏をあげさせていただいております。そして、念仏申させて頂く有難さを感じつつ、こうして毎日楽しんで生活をさせて頂いております。ところが、私の妻は、もう結婚して十七年にもなりますが、一向に念仏を申してくれません。別に夫婦間の生活には、何も文句の言い所のない妻なのですが、ただ念仏を申してくれないことが、淋しい限りです。この妻に、どのようにして念仏生活に入らせたらよいものでしょうか。お教え願います。(福島県、中村米三)

答 これは大変むつかしい問題です。夫婦の喧嘩は犬も食わぬと申しますが、この場合

別に喧嘩ではないのですが、人々により、又家々により生活様式も違い、夫婦の考え方も一概に言えませんので、どうすればどうなるかはっきり言えない様に思います。

ただこの場合、無理に奥さんに、こうこうして念仏しなさいと強制したり、無理にいうことは、余り感心しません。法然上人の教えは、もっと自由なもので、「申せたら申せ。申せなんだら、申せるようになるまで、待て」と言ったような、柔かいもののようには感ぜられます。それは上人の人格そのもののなのですが、しかしそうだからと言って、「勝手にしろ」と捨てた様なことは言っておられません。やはり、念仏が申せるようにしてやれと申されています。

そして、もっとも念仏申うやすい状態で念

仏を申すようにすすめておられます。

今の場合、ご夫婦は生活の中では、仲むつまじい様ですから、貴方が、念仏信者として努力されておれば、いつしか、奥さんも必ずそれに習うのではないでしようか。「鳴くまで待とう」という辛抱と、そうした中でも、怠らず指導することをこころがけて頂き度いものです。やさしく、いたわり、機会があれば、「一緒に寺詣りに行かないか」とさそってみて下さい。人間は、健康で幸福である時、なかなか、宗教には近づくものなのです。しかし、人生にはいろいろと苦難も出てきます。また、死という避けることのできぬ宿命にも直面します。そうしたことに、直面するときは、念仏をすすめるチャンスです。

しかし、そうでなくても、夫を信じて共に生活に励んでおられる奥さんの事ですから、必ずや貴方の気持ちを通じて、いつかは念仏を申されることと信じます。ご両人の幸福を祈って止みません。

和訳 經部

觀無量壽經 (四)

念仏は逆罪をも滅す

村 瀬 秀 雄



一、大乘の凡夫往生

釈尊は、阿難尊者と韋提希上人に引続き説いた。

上品下生の人というのは、因果の理法があつて、これが宇宙を支配していることを信じ、大乘仏教の教えを誹謗することなく、仏道を成就しようとする心をおこし、こうした善行から生ずる功徳をふり向けて、極樂浄土に往生したいものであると願う人のことである。こうした行者が命が終ろうとする時に當つては、阿彌陀仏は觀世音、大勢至の両菩薩を初め、五百の化仏に囲まれながら、黄金の蓮華を捧げて行者の前に現われる。化仏たちは行者に手を授けながら「法子よ、汝今は清浄にして菩提心をおこした。よつてわれわれは汝を迎えにきたのである」と讃めたたえる。行者は自分を振りかえつてみると、すでに金の蓮華台に坐していることを知る。行者は仏の後に随つてゆき、七宝池の中に往生し、そこにおいて聞えてくるすべての音をよく聞くと、その音が仏教を説いていることを知る。やがて行者は十方諸仏の国に遊んで仏

を供養し、そこにおいて甚深微妙の法をきいて、やがて法門をさとする智慧を得ることができさる。

こうした上品の往生、中生、下生の三生を觀察することを『上輩生の想』といい、第四觀と名づける。

次に中品上生の人というのは、不殺生や不偷盜等の五戒をたもち、一日だけ行ふ八戒斎を行い、その他の戒を修行し、このようにして大した過ちを犯さずに毎日を暮し、こうした善行から生ずる功徳を振りむけて、極樂浄土に往生したいと願う人のことである。こうした行者が命が終ろうとする時に當つて、阿彌陀仏は多くの比丘に囲まれながら、金色の光明を放ち、行者の前に現われ、苦、空、無常、無我の理をお説きになる。行者はこの説法を聞いて大いに喜び、自ら自分を振りかえつてみると、すでに蓮華台に坐していることを知る。行者は合掌した仏を礼拝し、まだ頭をあげない内に早くも極樂浄土に往生して、聞えてくるすべての音声は仏法を説いていることを知る。やがて行者は煩惱を断つ智慧や神通力を得て、すべての貧りをすてるこ

とができるようになる。

中品中生の人というのは、一日一夜だけの八戒齋をたもつか、又は、一日一夜だけ十戒をたもち、一日だけのことはあるが、こうした善行から生ずる功徳をふりむけて極楽浄土に往生したいと願う人のことである。こうした行者が命が終ろうとする時に当って、阿彌陀仏は多くの眷属とともに金色の光明を放って、七宝の蓮華を捧げ、行者の前に現われる。行者が耳を傾けると、どこからとなく声が聞えてきて「善男子よ、汝は三世諸仏の教えによく随ったので、われらが迎えにきたのである」といっていることがわかる。行者は自分を振りかえてみると、すでに蓮華の上に坐していることを知る。やがて西方極楽世界に往生し、合掌して仏を讃え仏法を聞いて喜び、そのかいあって、いずれは煩惱を断ずる者となることができる。

中品下生の人というのは、父母に孝養をつくし、世の人に対して慈悲を与える人のことである。この行者が命を終わろうとする時に当って、善知識が現われ、阿彌陀仏の極楽世界は安楽な所であること、阿彌陀仏が四十八願

のすべてを成就されていること等を説くので、行者はこの説法を聞くことができる。行者はこの説法を聞き終ってから命終し、たとえていえば壯士が臂を延すように実になやすく、西方極楽世界に往生する。やがて観世音、大勢至両菩薩から仏法を聞き、それによって煩惱を断ずる者となることができる。

こうした中品の上生、中生、下生の三生を觀察することを『中輩生想』といい、第十五観と名づける。

註

上品と中品の人には一見してそれぞれの善行を行う人の如くであるが、凡夫であることに相異はない。いまこれを列挙すれば、上品上生は大乗を修学する上善の凡夫、上品中生は大乗を修学する次善の凡夫、上品下生は大乗を修学する下善の凡夫、中品上生は小乗上善の凡夫、中品中生は小乗下善の凡夫、中品下生は世福を修する上善の凡夫である。（観經疏）

二、惡縁に遇う凡夫の往生

下品上生の人というのは、大乗の經典を誦

誦することがないというものの、多くの惡行をつんでも性質が愚かであるために慚愧することを知らない人のことである。このような人が命を終わろうとする時に当って、善知識がその人に教えて合掌させ、南無阿彌陀仏と称えさせる。するとその人はお念仏を称えた功德によって、その人の五十億劫にもわたる長い間の生死の罪が除かれる。そのために阿彌陀仏は化仏、化觀音、化大勢至をお遣わしになり、その人の前に到ってから「善男子よ、汝は念仏を称えたことによって諸罪が消滅した。よってわれわれが迎えにきたのである」とその人を讃めたたえる。こうした讃辭が述べられると同時に、その人は自分の部屋に化仏の光明が満ちていることを見て、大いに歡喜しながら命を終る。するとたちまちその人は宝蓮華の上に乗り、化仏の後に随って極楽浄土の宝池に往生する。ここにおいてその人の前に大悲觀世音菩薩、大勢至菩薩が光明を放って現われ、經典を説かれる。この説法を聞くことによって法門をさとする智慧を得ることができる。

註

1 十悪輕罪の人がお念仏を唱えて、その罪を滅することができるのは何故という問に対して法然上人は

「念仏三昧は重罪尚滅す。何にいわんや輕罪をや。余行は然らず。或いは輕を滅して、しかも重を滅せざるあり。或いは一を消して、二を消さざることあり。念仏は然らず。輕重かね滅し、一切遍く治す。たとえば阿彌陀業（不死業）の、あまねく一切の病を治やるが如し。故に念仏をもつて王三昧とす」（選撰本願念仏集）と答えられた。

下品中生の人というのは、五戒や八戒や具足戒という戒律を破り、さらに愚かにも教団の共有物の品々を盗み、教団の人々の衣食までも盗むことすらあり、自分の名聞利得のために仏法を説いて少しも慚の氣持がなく、かえって多くの惡事を行うことを以て身を飾るものであるかのように心得ている人のことである。このような罪人は惡業のために必ず地獄におちるものである。従つてかかる人が命を終ろうとする時には地獄の猛火が一時に迫

つてくるであらう。しかし善知識があつて大慈悲心をもつて、その人に阿彌陀仏の威徳を説き、かの仏の光明が勝れていることを説き、更に戒定慧とか解脱とか解脱に達する知慧とかを説くことができたとする。するとその人はこの説法を聞いたことによつて、八十億劫という長い間の生死の罪が除かれる。そのために押しよせてきた地獄の猛火は、たちまちにして消え、遂に清風となつて天華の間を吹きぬける。この華の上には化仏、化菩薩がいて、その人を迎えてくれる。そしてこの人は一瞬にして往生することができて、七宝池の蓮華に坐することができ、やがて觀世音、大勢至兩菩薩が現われ、その人を慰め、甚深の大乗經典を説く。この説法を聞いて、その人は大菩提心をおこす。

三、令声不絶具足十念

最後に下品下生の人というのは、不善の業である五逆罪¹や十惡業²をつくる人のことである。このような愚かな人は、惡業³の報いを受けてまさしく地獄におち、永遠に劇しい苦しみを受けるべき人なのである。

註

- 1、五逆は殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出仏身血の最も重い五つの罪。
- 2、十惡は殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚痴。
- 3、惡業は身と口と心との一切の悪い動作のことで、地獄におちる原因となる。

このような愚人が命を終ろうとする時に當つて善知識にあらうことができて、いろいろと慰められ、すぐれた仏法を説き教えられ、また念仏を称えるようにすすめられる。しかしこの人は臨終のためにいろいろな苦しみにせめられ、念仏を称える余裕をもつことができない。そこで善知識は「汝がもし苦にせめられて念仏する余裕がなつたならば、阿彌陀仏の御名を称えよ」とすすめる。その人はすすめられた通りに眞実の心をもつて、南無阿彌陀仏と十声数え続ける。この人は念仏を称えた功德によつて、念仏の一声一声にその人の八十億劫という長い間にわたつて犯した生死の罪が消える。その人がいよいよ命を終る時に、日輪のように輝く蓮華台がその人を迎え

に来る。そしてその人は蓮華台に乗って、一瞬の間に極楽浄土に往生することができる。

やがその人は觀世音、大勢至兩菩薩が大慈悲にみちた声によって仏法を説くのを聞くことができる。この説法を聞くことによって、歡喜して菩提心をおこす。

こうした下品の上生、中生、下生の三生を觀察することを『下輩生の想』といい、第十六觀と名づける。

註

1、善知識は仏法を説いて人々を仏門に入らしめる高德な僧。

2、經典には「声をして絶えざらしめ、十念を具足す」とあるが、このことによって念仏とは南無阿彌陀仏と声に出して訴えることであることがわかる。法然上人は「念声はこれ一なり。何を以てか知ることを得たる。觀經の下品下生にいわく。声をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿彌陀仏と稱せしむ。仏名を稱するが故に、念々の中において八十億劫の生死の罪を除くと。今この文によるに、声はこれ念念は即ちこれ声なること、その意明けし」

(選択本願念仏集)

といわれている。

3、念仏は王三昧といわれ程に勝れているが、その念仏を下品下生において説いた理由について、法然上人は

「下品下生はこれ五逆重罪の人なり。しかるによく逆罪を除滅すること余行のたえざる所、ただ念仏の力のみありて、よく重罪を滅するにたえたり。故に極惡最下の人のために、極善最上の法を説く所。例せば彼の無明(煩惱のもと)淵源の病は、中道(仏教)府藏の薬にあらざれば、即ち治すること能わざるなり。またこの念仏は靈藥府藏なり。この薬にあらざれば何ぞこの病を治せん」(選択本願念仏集)

といわれ、これだけみれば念仏は下品の人の中に有用の如しにみえるが、実は九品全部に通じて念仏を説いているのであるとして、次の如くいわれた。

「問うていわく。三輩の業みな念仏といふ。その義然るべし。ただし觀經の九品と壽經の三輩とは、もとこれ開合の異なり。もししからば何ぞ壽經の三輩の中には皆念

仏といい、觀經の九品に至っては上、中二品に念仏を説かず。下品に至りて始めて念仏を説くや。答えていわく。これに二義あり。一には問端にいうが如し、雙卷の三輩と觀經の九品とは開合の異とは、これをもつてまさに知るべし。九品の中、皆念仏あるべし。いかんが知ることを得たる。三輩の中に皆念仏あり。九品の中、なんぞ念仏なからんや。故に往生要集にいわく。問う念仏の行は、九品の中において、これいずれの品の摂ぞや。答う、もし説の如く行せば、理、上にあたり。かくの如くその勝劣にしたがいてまさに九品に分つべし。しかるに經に説く所の九品の行業は、これ一端を示す。現実に無量なりと。故に知んぬ。念仏また九品に通ずべし。二には觀經の意、初めには広く定散の行を説きてあまねく衆機にとし、後に定散二善を廢して、念仏の一行に帰せしむ。いわゆる汝よくこの語をたもて等の文これなり。故に知んぬ。九品の行は、ただ念仏にあることを」(選択本願念仏集)

「この語をたもて」は念仏せよの意である。

年 新 賀 謹

祐天寺住職

巖谷勝雄

目黒区中目黒五二四・五三
(七一二)〇八一九

照善寺

田丸徳成

大田区田園調布

鎮西学園長

上田貞雄

熊本市九品寺三丁目

静岡県富士宮市東町三ノ二八

大頂寺石井真峯

電話(〇五四) 三四六五番

だん王法林寺

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

教学研究会

須藤隆仙

函館市船見町一八一四

京都黒谷
西住院住職

戸川靈俊

京都市左京区黒谷町三〇

鎮西流根元地

聖光寺住職

小林忍戒

京都市下京区寺町綾小路下

明治天皇明石行在所
光明寺

山口諦存

兵庫県明石市鍛冶屋町五六

関宗八百年記念の提案

一ヶ寺一五重

布教師 小布施弘学

長野市松代町 長明寺

慶雲寺住職

北出立法

三重県多気郡大台町大字下三瀬

華陽院住職

日吉幼稚園長
日吉町保育園長

堀田良謙

静岡市日吉町二二二
電話(五二) 三六七三番

北安東保育園々長

堀田道子

静岡市北安東七五四
電話(五三) 八四八六番

年 新 賀 謹

華頂学園長

水 野 隆 樹

京都市東山区知恩院山内

京都市政短期大学

学長 三枝樹正道

京都府宇治市檀島町千足八〇
TEL 宇治四一〇一(代)

東山学園長

藤 原 弘 道

京都市左京区永観堂町

稲 岡 覚 順

川口市北町二ノ五〇 西福寺

浄土宗宗議会議員

井 原 文 雄

山口県柳井市柳井津 瑞相寺

浄土宗議会議員
知恩院顧問

栗 本 俊 道

東京都文京区大塚五二一〇
西信寺 住職

浄土宗議会議員

白 井 玄 祥

世田谷区玉川瀬田
法徳寺

浄土宗議会議員
蓮勝寺住職

柴 田 敏 夫

横浜市港北区菊名町五二二

浄土宗議会議員

飯 田 信 弘

四日市市中部二
光運寺

弘前市新寺町

貞昌寺

赤 平 昌 導

京都市東山区古門前通東山線西入

株式会社 安藤法衣仏具店

代表取締役 安藤 宇 助

法衣部(〇七五)(56)〇六九〇
仏具部(〇七五)(56)二四〇二

東京都港区芝西久保巴町一〇六

大本山増上寺御用達

野村桂造法衣店

電話(四三一)〇四二八番

法然上人鑽仰会

佐藤 佐藤 中村 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤
密 良 康 秀 信 昭 香 行 成 順
雄 智 隆 雄 常 彦 山 信 順
丈

創価学会文化祭に学ぶもの

私はテレビで創価学会の文化祭を見たが実に素晴らしいものであった。これを見た人は誰でもそう思ったに違いない。その後私は仏教の立場から私達念仏者と創価学会員と置き替えて考えてみたらおもしろい結果が現われたので一寸書いてみたのである。

数万を数える創価学会員のショーも見事であったが、若し数万の念仏者があの場所で念仏の大合唱をしたらこれも亦すばらしいものであるに違いない。然し相手は美しく見せるのが目的である。念仏はそうでない為色彩の上から見ればこれは確かに見劣りがする。だが共に解散後に創価学会員一人と念仏者の一人がその時行じたのと同じ事を繰返してやった時はどうであらうか。

創価学会員はおそらく一枚の美しく彩った板を持って同じ行動をとるであらう。この時これを見た私達は一体何をしているのか誰にも判らない。フーテン踊りになってしまうからである。又念仏者の場合はどうであらうか。数万人の中の一人が念仏する時の姿は実

に充実したものである。創価学会がショーを演ずる理由はショーの素晴らしさが創価学会思想の素晴らしさと思わせる為である。

私達が何気なく行じている念仏は誠に地味であり少しの変化もない為、時には退転する事もあるが何の変化もない念仏を行ずることが真実の仏道なのである。

これは大切な事であるが観無量寿経の第八観に、「今行じている事を経文に合わせてみよう。若し合わなければそれは妄想である」と教えられている。これは例をとると、「あなたが今呑んでいる薬を処方箋と合わせてみなさい、若し合わなければその薬は間違っているのだからいくら呑んでもあなたの病氣は治らないからやめなさい」と教えているのである。

ここで忘れてはならないことは念仏は観經に説いてあるが、ショーも額目も仏教教典のどこにも書いてないのである。即ち釈尊が禁じた妄想を創価学会は行じているのである。私達は釈尊の教えられたこの正しい念仏を常に行じ邪宗の折伏などで心が動揺しないように確く信じて幸福への道を前進すべきである。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 正月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十二年十二月二十五日 印刷

昭和四十三年一月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人顕仰会

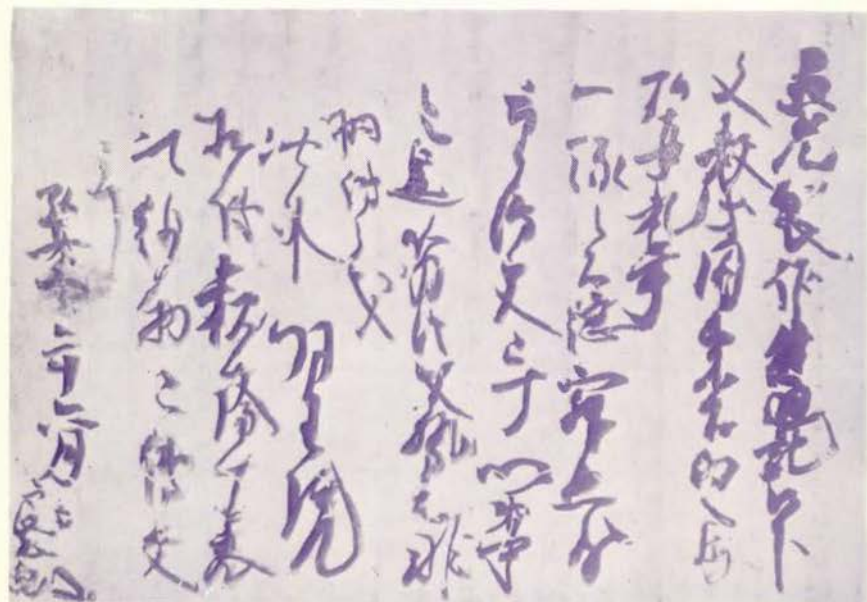
電話東京二六二五九四四番

郵便東京八二一八七番

枯れきつた良忠の筆蹟

良忠上人附法状

鎌倉光明寺所藏



良忠には沢山の弟子がいて各方面に活躍、現在ある浄土宗の基礎を築いた。その中で良忠が最も可愛かったのは実子良暁である。彼は叡山で修行中の良暁を呼び、財産をはじめ浄土の奥義を全て伝授して後継者にした。その伝授の一通がこの文書である。

従来は字があまりにも流れているため、良忠ともあらう人がこんな下手な字を書くはずがない、という理由で偽物とされてきた。情ない話である。八十九歳で死の数日前にこれだけの字を書ける人が他に誰あらう。文書には良忠の晩年を物語る精力的な運びがにじみ出ていると同時に、棒と無視した自由奔放な態度がくみとれる。しかもその中に暖い親子の情がにじみ出ている。良忠の人柄がよくあらわれている名筆といつて過言ではない。僧侶には名筆家が多いが、これほど枯れきつた味のある字を残した高僧は少ないであろう。苦難を克服した年輪がそうさせたのであろうか。

愚老製作伝通記以下

文釈等、関東下向之処

弘安九年

一流之大徳寂恵房

重而伝受、門弟中

令違背此義勢者、非

相伝之儀、

此外明王院

相伝積論十卷、

以抄型已伝受

早

弘安十年六月 日

良忠(花押)

(玉山成元)

年 新 賀 謹

總本山 知恩院

門主 岸 信宏

京都市東山区林下町
電話(56)〇〇三五 / 三八

浄土宗宗務庁

大本山 増上寺

法主 椎尾 弁匡

大本山 光明寺

法主 大野 法道

鎌倉市材木座六ノ十七
電話〇四六七(2)〇六〇三

大本山 善光寺大本願

法主 一条 智光

浄土宗宗務支所

上宮 学園

小林 大巖

鎌倉大仏殿
高德院

住職 佐藤 密雄

心光院

戸松 学瑛

東京都港区赤坂四丁目
浄土寺住職

阿川 貫達

里見 達雄

東京都文京区小石川三十四一六
伝通院住職

大河内 隆弘

電話 (814) 三七〇一

神奈川県葉山町

相福寺
明照幼稚園
杉田 義俊